



swedish culture

スウェーデン文化交流会発行
2006年2月 JFS 117 a

児童文化

自由で率直、時にはちょっと生意気なこともある。だが児童文化の最も素晴らしい点は、それが温室のように新しいアイデアや表現を育てる場所だということだ。そのため、文化に携わる多くの人々が、児童文化は才能を開花させるための自由地帯であると考えている。

牧歌的でのどかな生活を送れる子供たちはわずかしかない。したがって児童文化も、いきおい困難や苦痛に触れざるを得ない。大人の文化と同様に、悲哀や離婚、失業、死、愛、エロチシズム、裏切り、虐待などがすべて取り上げられている。スウェーデンの児童文化に携わるほとんどの者が、あるがままの人生を見せようとしながら、同時に一方では子供たちに夢と想像の世界への翼を与えている。真の芸術作品は私たちの心を揺り動かし、大きなトラウマとなる経験を克服する道を必ず与えてくれるのである。



スウェーデンの作家で教育者のエレン・ケイ(1849-1926年)が「児童の世紀」と名づけた時期を通じて、子供についての一般的な考え方は大きく変わった。また、子供たちが文化を経験する権利、そして文化を通してその夢や感情を表現する権利についての考え方も非常に大きく変化した。今日、子供時代は成人期が始まるのを待つ準備期間ではなく、それ自体がひとつの大切な時期と見なされている。子供たちが文化に出会うのは、大人としての生活について何かを教わったり準備したりするためではない。泣いたり笑ったり、また自分の感情を目に見える形で表現したり、あるいは今この場所で自分のことをまじめに考えてもらう機会を与えてもらうために、子供たちには文化に出会う権利がある。文化は世界を広げてくれる。スウェーデンの児童文化には、子供たちが創造力を育み、自分なりの表現を見つけられるようにするという、はっきりとした目的がある。それはアーティストになる訓練をするためではなく、自分の人生を豊かにするためのものである。

21世紀初頭の今、多くのスウェーデンの子供たちにとって、書籍、演劇、音楽、ダンス、美術のどれもが生活から切り離せないものとなっている。子供たちが文化に触れる権利は、子供時代という概念と完全に統合され、さらに「国連児童の権利に関する条約」でも取り上げられている。

現在スウェーデンでは、新しく生まれた子供が初めて小児科診療所を訪れた時、その子に本を贈ることになっている。地方自治体の芸術関係担当職員は、子供の言語の発達のためにおとぎ話や童謡、わらべ歌は不可欠だとし、子供の親が文化に興味があるかどうかに関係なく、文学に触れることはすべての子供に与えられるべき人権だと位置付けている。

エレン・ケイが生きていたら、このような進展を見て満足したことだろう。ケイはすでに1900年に、子供には創造力を養え

るような美しいものに囲まれる権利があると主張していた。また、20世紀初めにヨーロッパからスウェーデンに伝わった、美学に重点を置く革新的な教育方法を推進する大きな力となった。

このような精神に支えられ、学校の補助教材や薄暗く殺風景なことが多かったインテリアを近代化し、改善するための努力が続けられた。この目的のため、教育関係当局はその時代の何人かの有名な作家や画家に協力を依頼した。1906年、セルマ・ラーゲルレーヴの有名な「地理の教科書」である『ニルスのおふしぎな旅』が出版され、子供たちも教師も、丸暗記によって覚えたことではなく、楽しい読書によって吸収したことこそ、心や頭の中にいつまでも残るのだということが分かったのである。

文学

ちゃっかりクラークといとこのビタミン(Krakel Spektakel and Cousin Vitamin)、長くつ下のピッピー、アルフォンス(Alfie Atkins)、エーミル、きかんぼぼうや(the Wild Baby)、ミーナとコゲ(Mina and Käge)、トゥーレ(Ture)、小さな妹ウサギ(Little Sister Rabbit)、ママ・ムーとミスター・クロウ(Mama Moo and Mr Crow)スウェーデンの子供たちにはたくさんの友達がいる。少なくとも、児童書の中の住人たち、悲しみや楽しみや詩がごちゃまぜになった世界の住人たちに、子供たちはいやおうなく引きつけられている。児童文学はスウェーデンの児童文化の基盤と言えよう。現代の絵本は、子供の初期段階の芸術的な想像力に決定的な影響を与える。エルサ・ベスコフの『ちいさなちいさなおばあちゃん』によってスウェーデンの絵本の名声が高まってからというもの、出版社は絵本に第一級の挿絵画家や画家を使うようになった。今では、児童書の挿絵を描きながら、他方で美術館に飾るような本格的絵画を描くという若い画家も珍しくない。このような多面的な画

家としては、ヨックム・ノルドストロム(Jockum Nordström)、スティーナ・ヴィルセン(Stina Wirsén)、アンナ・ヘグルンド、ヨアキム・ピリネン(Joakim Pirinen)、ペルニラ・シュタルフェルト(Pernilla Stafelt)などがいる。

草分け

子供たちの絵本の世界への扉を最初に開いたのは、画家であり作家でもあったエルサ・ベスコフだった。ベスコフは55年もの間、数多くの絵本を世に送り続けてきた。それが児童文化というコンセプトの発達に大きな影響を及ぼしたのである。最も初期の作品でさえ、子供と大人が同じ感情を持ち、相手を尊重しあっている。これは当時としては非常に珍しいことだった。ベスコフは個人的にも思想的にも、エレン・ケイに近いものがあつた。

ベスコフの本は絶えず版を重ねており、スウェーデン国内でも外国でも現代の古典の座を占めている。しかし、ベスコフの本は今でこそ素晴らしい作品と評されることが多いが、最初に出版された時には論争を巻き起こしたのだった。批評家たちは、1910年に発表された『もりのこびとたち』に出てくるこびとがあまりにも醜く恐ろしいため、子供たちを怖がらせるものだと考えた。また、物語そのものもあまりに夢想的だと言われたのである。しかしベスコフは、スウェーデン人なら誰でも夢見る花咲く庭園や苔むした森の空き地、そして小さな花が咲き乱れる初夏の牧場(これはおそらく最もスウェーデンらしい心の風景だろう)などで生まれた物語を、時を越えて今なお語り続けている。

ベスコフと同時代の作家の一人に、画家のイーヴァル・アロセニウスがいる。アロセニウスはその短い生涯のうちに何冊かの絵本を残した。それらは皆、娘のリリアンに捧げられたものである。アロセニウスの物語は驚くほど現代的だ。リリアンとネ



表紙の写真：ハルプロ・リンドグリーン作『少年と星』より。当ページ：エルサ・ベスコフ作『もりのこびとたち』より。

コが繰り広げる冒険物語『ネコの旅(Kattresan)』は100年前に書かれたものだが、今読んででもとても楽しい。

ベスコフとアロセニウスの後、スウェーデンの児童文学が大きな注目を浴びるまでに50年の月日を費やした。だがその時には、スウェーデンの児童文学の素晴らしさに世界中が脱帽したのだった。1940年代から1950年代にかけて登場した作家や挿絵画家の何人かは、今でも絵本の第一人者として評価されている。

福祉社会の反乱

1945年に文壇に登場したレナート・ヘルシングの最初の作品は『ネコが銀の角笛を吹く(Katten blåser i silverhorn)』だった。やがて彼は、楽しい狂気と実存的なメランコリーに満ちたナンセンスな詩を次々と発表していった。

しかし世界をあつと言わせたのは、ずばずばものを言う赤毛の主人公を描いた作家、アストリッド・リンドグレンだった。1945年に発表された最初の『長くつ下のピッピ』は一大センセーションを巻き起こした。警察にも学校にも社会的慣習にも従わない、独立心旺盛な女の子ピッピに、モラリストたちが恐怖を覚えたのも当然のことだった。

アストリッド・リンドグレンの作品は数多く、70以上の言語に翻訳されている。リンドグレンの作品では陽気さと想像力がひとつになり、しかも悲しみを恐れない。『はらかな国の兄弟』、『山賊のむすめローニャ』、あるいはそれほど有名ではない短編集『小さいきょうだい』などには、それが顕著に表れている。これらの作品では、老いや死、喪失や孤独が人生の自然な一部分として描かれている。

スウェーデンの児童文学作家にはもう一人、リンドグレンがいる。約40年にもわたって笑いと涙を提供し続けてきたバルプロ・リンドグレンだ。『ロランガ、マ

サリン、ダルタニヤン(Loranga, Masarin and Dartanjang)』は子供にも大人にも人気の作品である。これらの「三銃士」―ダルタニヤンは自分の健康状態をいつも気にしているおじいちゃん、ロランガはいつも頭にティーパーカパーをのせて走り回っている子供みたいなお父さん、マサリンは人なつこい子犬のように頬がたるんだ太った少年である―の物語を読むと、長くつ下のピッピの行動がまだおとなしく思えるくらいだ。

バルプロ・リンドグレンは気ままな歌うたいの作家と言われることがある。だが彼女のユーモアは、悲しみや苦しみのすぐ隣にある。「スパーヴェル(Sparvel)」のシリーズには、居場所のない子供や大人の絶望や憧れが描かれている。

バルプロ・リンドグレンと挿絵画家のエヴァ・エリクソンの共同作品は大きな成功を収めている。2人の共作である「きかんぼうや」シリーズは、ママの手に負えないやんちゃな男の子が毎日の生活を果てしない冒険にしてしまう物語で、読者を大いに笑わせてくれる。また幼児向けの「マックス(サムぼうや)」シリーズもリンドグレンとエリクソンの作品。これらの作品は、ひとつのストーリーを単純で豊かな言葉で語っているという点で、他の幼児向けのの本とはまったく違うものがある。

バルプロ・リンドグレンの作品のうち、いくつかは戯曲化されている。例えば『小さな老人の物語(The Story of the Little Old Man)』、サーカスの少年と仲良しの馬の物語『少年と星(Pojken och stjärnan)』、それに世界中の弱い子供たちの寂しさやのけ者意識を描いたロシアのストリートチルドレンの物語『アンドレイを探して(Andrei's Search)』などである。『ロランガ、マサリン、ダルタニヤン』のアニメ映画も2004年に上映された。

作品の持つ強力な意味合い

ヴィヴェッカ・レリンとウルフ・スタル

クの作品は、どちらも楽天主義に彩られている。彼らは難しいテーマや感情についても語っているが、その大きな特徴はやはり物事を温かく人間的な視点から表現できる力だろう。ヴィヴェッカ・レリンは、元気な中学生の女の子「ミンミ」のシリーズを書いたほか、「エディ」と弟アンデシュのシリーズでは貧困家庭の子供たちの苦境を大きな洞察と共感をもって描いている。幸い、「エディ」シリーズはセンチメンタルに流れず、親の愛情や大人の見当違いな思いやりも大切に描かれている。

ウルフ・スタルクの作品には、子供時代の思い出を呼び起こし、それに人間の持つジレンマを反映させるようなものが多い。スタルクの用いる言葉は非常に豊かな意味を含んでいるので、ほんの数行読んだだけでも、そのページから過ぎ去った日々の香りを嗅ぎ、音を聴くことができる。ヨックム・ノルドストロムが挿絵を描いたスタルクの『おにいちゃんといっしょ』では、両親が2人の兄弟を親戚に預けて休暇に出かけてしまった夏のことを描いている。

少し前まで、スタルクは画家のアンナ・ヘグルンドと共に絵本も制作していた。作品には『おねえちゃんは天使』や、コンクリートのジャングルに住む少年の夢の冒険を描いた『ぼくはジャガーだ』などがある。アンナ・ヘグルンドは、2匹のクマを描いた『ふたり〜2ひきのくまの物語』など、自分でも児童書を制作している。自分の息子たちを主人公にした『夜の旅(Nattresan)』や『はじまりは暗い闇』は、楽しいシャガール調のシンボリックな絵の絵本だ。これらは他の多くのスウェーデンの児童書とは一線を画した独特な絵本となっている。

作家と挿絵画家

スウェーデンの絵本は他の児童文化と同じく世界中で高く評価されており、画家は自分の好きなように作品を作ることができる。



左: アストリッド・リンドグレン作『長くつ下のピッピ』、挿絵はイングリッド・ヴァン・ニイマン。右: ヨックム・ノルドストロム著『水夫とベッカ(Sailor and Pekka)』。

ここ20年間、挿絵画家や画家はスウェーデンの本に、ちょっぴり風刺を利かせた大胆で思いきったデザインの挿絵を描き続けてきた。ピヤ・リンデンバウムとエーヴァ・リンドストロムは自分の作品に挿絵を描くことも多く、テンポの速いマンガにヒントを得た作品を発表している。リンデンバウムの『エルセ・マリーと7人の小さなパパたち(Else-Marie and her Seven Little Daddies)』や『ブリジットと灰色のオオカミ(Bridget and the Grey Wolves)』はいずれも、家族の会話や、子供たちはこうあるべきだというお定まりの考え方を皮肉な目でとらえている。

エーヴァ・リンドストロムの作品はさらに風刺が強い。『スティグが好き(Jag gillar Stig)』と『私とスティグは穴を掘る(Jag och Stig gräver en grop)』はどちらも2人の子供の友情物語だが、愉快な筋書きの中に、男女の性別や人間の弱さについて心に訴え

るものがある。リンドストロムの挿絵にはげばげばしいが親しみがあがり、彼女はわざとべちゃんこの人物を描いているが、それはちょうど子供が描いた絵のようにシンプルで、自由にあふれている。

グニツラ・ベニストロムの有名な主人公「アルフォンス・オーベリィ(Alfons Åberg)」は子供の目から人生を簡潔にとらえた作品で、30年にもわたり小さな読者の間で絶大な人気を誇っている。

スベン・ノルドクビストが書いた、過去のある時代に住んでいる「ペテルソン(Pettson)」という名前の老人とそのネコ「フィンダス」についての物語は、非常に人気の高い絵本シリーズである。このおかしなペアを描いたシリーズには、『フィンダスのたんじょうび』や『フィンダスのきつねがり』などがある。

画家で作家のヨックム・ノルドストロムは、さまざまなテクニックや材料を混ぜ

合わせて一種のコラージュ作品を作るのを得意としている。2人の登場人物、老いた水夫の「セイラー」とその犬「ベッカ」は自分たちだけのクレイジーな世界に住んでいる。それはかわいらしさや自然主義からはほど遠い、どちらかというところジャズのような世界と言えよう。

レーナ・アンデションの明るい水彩画の挿絵とユーモアのセンスは、エルサ・ベスコフから学んだものだ。ベスコフと同じく、アンデションも自然探偵ニッキー(Nicky the Nature Detective)やステイーナ(Stina)の物語を韻文で書いている。また、最近発表した小さな子供たちのための物語『チックタックチックタック』や、幼児のためにわかりやすく描いた『ともだちうさぎのカニン~釣りに行こう! (Kanin-Fiske)』、『ともだちうさぎのカニン~さあさあおふろだ!』、『ともだちうさぎのカニン~パーティしよう!』などの文章のない絵本も同様である。

だがアンデションが最大の成功を収めたのは、クリスティーナ・ビョルクと共同で制作した「リネア」のシリーズである。『リネア~モネの庭で』はクロード・モネの人生と作品を描いた子供向けガイドとして、世界中でベストセラーになっている。

また作家で画家のラーシュ・クリンティングも、田園を舞台にした物語を作っている。クリンティングの作品はかわいらしすぎないところが特徴だ。作品には、「カストール」とその友達フリッペを登場人物にした創意あふれる手作業シリーズ、『カストールのたのしいまいにち~たんじょうびにはケーキをやこう!』や『カストールのたのしいまいにち~あたらしいエプロンできた!』などがある。

ジョージ・ヨハンソン(George Johansson)とイエンス・アールボム(挿絵)による「フレディ・フィクサー(Freddie Fixer)」シリーズも大変人気がある。こちらも手作業シリーズと言えるが、楽しく読める実用教本と考えてもいいだろう。今では、他のスウェーデンの児童書の登場人物と同様にDVD化されているものが多い。

幼児向けブックアート

文字のない幼児向けの絵本は独立したジャンルを確立しており、単純なモノを描いただけというようなものではない。アンナ・クララ・ティードホルムの特徴は、どんな知的水準・芸術的水準の人々にも読める絵本を提供しているところだ。ごく幼い子供たち向けには『たたいてみよう』、『どうしてなの?』、『やあくマちゃん(Nalle Hej!)』などの作品があり、これらはどれも、ページをめくるたびに2つの言葉からなる文章と図案化された色彩豊かな絵による新しいシーンを楽しむことができる。もう少し年上の子供たち向けには、哲学的な少年トゥーレと犬のヘイの「旗ざおとチューリップのあるきれいな小さな家」での生活の物語を描いている。

アンナ・クララ・ティードホルムと、詩人で劇作家のトーマス・ティードホルムと一緒に制作した絵本も数多くある。これらの絵本では伝統的な童話を枠組みに用い、人生や、この世界における自分の位置というものを模索している。演劇やパントマイムとしても上演されている『ウグリ・ラ・ブレックへの旅(Resan till Ugri-La-Brek)』では、兄と妹が「煙がまつすぐ空へ立ち昇る」村でいなくなってしまった祖父の行方を追い求め、祖父の死に対する感



『リネア~モネの庭で』より。クリスティーナ・ビョルク作、挿絵はレーナ・アンデション。



情を克服することができるようになる。また『カスペールの日々(Kaspers alla dagar)』は天地創造を描いた物語で、「いつでも歌や踊りがあり、にぎやかなおしゃべりに包まれていた」頃の話である。

演劇

スウェーデンの子供向けの演劇はもはや、よそいきの服を着ておました子供たちだけのものではなくなった。これまで演劇とは上中流階級の子供たちがクリスマスに連れて行ってもらうようなものだったが、今では社会階級や住んでいる場所に関係なく、ほとんどの子供たちが舞台を見ることができている。政府の芸術政策では、子供たちには優先的に芸術を鑑賞させるよう定めている。もっとも残念ながら、政府の考えはまだ現実には完全に実施されているとは言いがたい。

子供向けの演劇があらゆる面で子供に近づいたのは、1970年代に台頭した急進主義に負うところが多い。当時は役者も監督も劇作家も皆、スウェーデンの劇場から姿をくらまし、全国の学校の体育館へと散っていった。それは演劇を子供たちの生活の自然な一部にするためであり、子供たちのために書かれた演劇に彼ら自身の経験を反映させるためであった。また、このように各地へ散った劇団は、子供たちが自分とは特別に選ばれ、認められた存在だと感じるこ

とができるよう、少人数の観客に見てもらいたいと考えていた。

クララ劇場(Unga Klara)

ストックホルム市立劇場と提携関係にあるクララ劇場は、スウェーデンで最も創造的な劇場のひとつとして、年若い観客を集めている。芸術監督のスザンヌ・オステンはもう何十年もの間、監督や俳優、アーティスト、ライターと協力し、演劇を通じて子供たちの生活や境遇に浸透することを目指してきた。このような実験のプロセスは1975年、オステンとペール・ライサンデル(Per Lysander)がエウリピデスの古典をもとにスウェーデンの子供たち向けに初めての悲劇『メデアの子供たち(Medeas barn)』を制作したときから始まった。

クララ劇場の実験は、探求的で非常にユーモラスなアプローチと、恐れることなく人間のジレンマに切り込んでいく新しいスタイルの演劇を生み出した。ポリエ・リンドストロムの『スピリット(酒)(Sprit)』では、酒におぼれた両親を持った子供はどうやって強く安心して育つことができるのかと問いかけている。グニッラ・リン・パーション(Gunilla Linn Persson)の『ドルフィン(Delfinen)』は、突然兄弟が与えられるというトラウマを描いた幼い子供たち向けの演劇。そしてニルス・グレデビー(Nils Gredeby)の『イリーナの新しい生活(Irina's

nya liv)』は、知的障害のある作家イリーナ・フォン・マルテンの実話に基づいた作品で、人と違うということを温かく描いた喜劇である。

子供の観客のための古典

ヨーテボリのバック劇場(Backa Teater)は時代を先取りした劇場である。ここでは古典を用いて現代の子供たちの心に訴えかけている。シェークスピアの『十二夜』の上演では演劇の歴史をたどり、オランダの劇作家ポーリン・モール(Pouline Mol)の『王の子、イフィゲニア(Ifigenia Kungabarn)』はギリシア神話をもとに究極の裏切りを描いている。バック劇場では、モザンビークやエジプトなど外国の劇団の上演も多い。エジプトの劇団が上演した時には、一味違ったシェークスピアの『夏の夜の夢』を薫り高く演じた。

ヨーテボリの子供向け市立劇場、ワン・フライト・ダウン(One Flight Down)の芸術に対するアプローチも、バック劇場とよく似ている。ここでは小さな子供たち向けに、人気のある本の登場人物が登場するが、その演出には劇場独自の味付けがされている。小さな子供たちは非常に集中力があり、普通の大人が考えるよりはるかに理解力がある、というのがワン・フライト・ダウンの考えだ。芸術監督のラーシュ・エリック・ブロスネール(Lars-Eric Brossner)は



左上：ヨーテボリ市立劇場で上演された『小さな老人の物語』。右上：デゲルフォルス市立音楽学校でバイオリンを学ぶマリア・マーカスソン(Maria Markusson)。写真：ラーシュ・エプスタイン(Lars Epstein)。下：ティトゥット人形劇場で上演されたアロセニウスの『ネコの旅』。次ページ：ペーロ劇場で上演されたバルプロ・リンドグレン原作の『ベニーとピンキー』。写真：マルティン・スクーグ(Martin Skoog)。

10年ほど前に、俳優のトーマス・ヴォン・ブロムセンと共同で子供向けの戯曲『小さな老人の物語』を書いた。これはスウェーデンの子供向けの演劇の中で最も人気のある作品のひとつになっている。バルプロ・リンドグレンの児童書を原作としたこの劇は、独りぼっちな老人がまず一匹の犬と出会い、その後小さな女の子と出会って、友情と人生の小さな喜びを見つけるというメランコリックな物語である。この劇はスウェーデンの劇場ではいつも上演され、日本やロシアなど外国でも多くの劇場で上演されている。

ストックホルム、その他の都市

子供たちはストックホルムの劇場や地方自治体の劇場で、多くの演劇を見ることができる。

ストックホルムの王立劇場ドラマターテンには、劇場つきの児童劇団ウंगा・ドラマターテン(Unga Dramaten)があり、小さな舞台で近くから観劇できる。小さな子供たちと劇場の有名な役者が触れ合う機会も設けられている。かくして白髪頭のエルランド・ヨセフソンがロアルド・ダールの「アッホ夫婦」(Mr and Mrs Twit)の物語を語ったり、年配の俳優の一人が子供たちのグループを連れて舞台裏を案内したりすることもある。ドラマターテンは若い新進の劇作家にも関心が深い。そのひとりが、伝統的な演劇という考え方に挑戦するルーカス・スヴェンソン(Lucas Svensson)だ。例えば、受賞に輝いた『月から落ちて(Fallna från månen)』は、自分の人生は自分で決めたいと願う女の子の心理的メランコリックなドラマだが、楽しい喜劇に仕上がっている。

全国的に活動しているもうひとつの児童劇団はウंगा・リクステアテン(Unga Riksteatern)である。この劇団は、誰もが児童劇団を見ることができるよう、スウェーデンで国内ツアーを行っている。また、演劇の因習を打ち破ることを目標のひとつに掲げている。受賞に輝いたミーア・トーンクビスト(Mia Törnqvist)の戯曲『ノラ・シェラザードの秘密の生活(Nora Schahrazades hemliga liv)』は、生まれたばかりの娘を失った若い夫婦が、あつかましい天使の助けによってその悲しみを克服し、将来に夢を取り戻すことができるという話で、老若を問わず訴えかけるものがある。

エリザベス・フリック(Elisabeth Frick)の『モリー、買い物に行く』(エヴァ・エリクソンの絵本をもとにした物語)の劇も老若を問わず人気がある。歌あり、パントマイムあり、弦楽四重奏ありのステージで、モリーはあつという間に古典的地位を占め、2003年にウブサラで開かれた演劇ビエンナーレではヨーロッパ中の観客を沸かせた。

スウェーデン南部にある地方劇場、ブレイキング・クロノベリ劇場(Blekinge/Kronoberg)もここ数年、ごく小さな子供たちに直接語りかけるなど、児童演劇で多くの画期的な実験を行っている。ユディット・ベネデク(Judit Benedek)の『いやになるほど聞こえてくる(Det hörs så det knakar)』は観客と掛け合いを行う小品で、童謡にまったく新たな意味を与えている。これはベケットの精神に基づいた幼児のための劇で、確実でしっかり認識できると思っていたものを驚くほど違うものに変えてしまう楽しいゲームだ。さらに、ウルフ・ニルソンとアンナ・クララ・ティードホルム原

作の『さよなら、マフィンさん』の上演は大きな成功を収めた。これは、皆にとっても愛されたが、年をとって疲れたモルモットが、まもなく終わろうとする自分の人生を振り返るといふ物語である。

カルマルの市立劇場(Byteatern)は、仮面やアーティファクト、音楽、舞台芸術の作品を上演する地方劇場だ。大きな注目を集めた作品のひとつ、『空飛ぶチーター(Den flygande geparden)』は、シーヴ・ウィデルベリ(Siv Widerberg)の書いた8歳の少年ハッセとアルコール中毒の両親の物語をもとにしたドラマで、1970年代の社会的リアリズムの流れから生まれた作品である。だが同劇場はそれに、どんなにか弱い子供の人生にも美と幸福が訪れる可能性があるという独自の考えを付加して、物語に新たな次元を開いた。劇団は日本の文楽人形をヒントにした大きなあやつり人形を使う。人形と音楽と詩、そして物語の重要性に対する確固たる信念をもって上演した舞台は、美学に関する議論や自然主義、スウェーデンの児童演劇のテーマの選択に大きな影響を与えることとなった。

アーティファクトによる演劇

市立劇場のメンバーには、ビジュアル・アーティストとして仕事を始めた人が多い。イメージやデザインや素材を成形・加工して、仮面やあやつり人形など、想像を絶する形を作る。ストックホルム市立人形劇団には、そういうアーティストが数多くいる。この人形劇団は1958年にミハエル・メシュケ(Michael Meschke)が創設して以来、多くの人形師を輩出してきた。メシュケの努力の結果、同劇団はスウェーデンで大きな名声を得ており、今では大学でも教えている。

ストックホルム市立人形劇団の芸術監督としてミハエル・エシュケの後を継いだヘレナ・ニルソン・アルバレス(Helena Nilsson-Alvarez)はさらに、アンナ・ヘグルンド原作の『ふたり〜2ひきのくまの物語』や、オランダのマックス・ベルジュイスの『かえるくんとたびのねずみ』など、幼児向け作品に磨きかけた。

幼児(2〜3歳)向けに筋書きをやさしく解釈した劇の上演は、スウェーデンの得意とするところだ。ティトゥット人形劇団(Tittut puppet theatre)は何年もかけて、幼児向けの特別な演劇美学を発達させてきた。同劇団は、人形や音楽、演劇、そしてしばしば観客を取り囲むように作られるセットなど、さまざまな道具を駆使し、子供たちも劇の言葉を理解できるという信念に基づいて人形劇を上演している。また国内や外国にもツアーを行っており、児童書をドラマ化することが多い。バルプロ・リンドグレンの「きかんぼぼうや」やヤノツシュの「小さなくまと小さなとら(Little Bear and Little Tiger)」シリーズ、それにアロセニウスの『ネコの旅』などはロングランを続けている。

ティトゥット人形劇団は独立劇団である。スウェーデンには、このように公的機関とは関係なく活動している子供向け劇団が数多くあり、子供の見る舞台はこれらが大部分を占めている。

スウェーデンの独立系の役者の一人に、スタファン・ウェスタベリ(Staffan Westerberg)がいる。ウェスタベリはスウェーデンの児童演劇史における重要人物である。彼の美学に対する姿勢は際立っており、深い悲しみと沸きあがるのを抑えた陽気さとを



併せもった演技が非常にうまい。ウェスタベリの演劇の世界では、死は引き出しの中に住み、木製のスプーンが互いに「好き」「嫌い」と言い合い、靴下やウールのストッキングがさまざまな冒険に乗り出してゆく。ウェスタベリは脚本を書き、監督を務め、セットや人形を作り、歌を歌い、演技をする。素朴な詩と壮大な詩を組み合わせ、大人にも子供にも訴えかける劇を作り上げている。また、古典作品を脚本に書き直すことも多い。『おばけのホウレンソウ(Spökspenaten)』や『小さな夢の劇(Ett litet drömspel)』は、ストリンドベリの作品をもとに書き上げたものだ。最近では、ハンス・クリスチャン・アンデルセンの童話をもとに『幸福の長靴』を書き上げている。

パントマイムは演劇分野としての成長が著しく、1977年以来、パントマイム劇場がそのリーダー格となっている。彼らは何年にもわたって、ユーモアと闇を使った崇高な演劇表現を追究しており、特に『完全なペルニラ(Perfekta Pernilla)』や『イリヤとラッコ〜2人の兄弟(Ilja och Racko – två bröder)』はその好例で、どちらもスウェーデンのパントマイムの名手、ボー・W・リンドストロム(Bo W Lindström)が主役を演じている。

パントマイムと普通の演劇とを統合したのがペーロ劇場(Teater Pero)である。この劇場は国内の子供向けの最高作品をいくつか上演している。例えば、『黄金の鷲リガル(Regal, the Golden Eagle)』(ラーシュ・クリンティング原作)、『少年と星』、『ベニーとピンキー(Benny and the Binky)』(ともにバルプロ・リンドグレン原作)などがあり、ペーテル・エンクビスト(Peter Engqvist)が監督を務めることが多い。

アワ・シアター

「児童劇場」という言葉の幅広い定義には、子供や少年少女自身が参加する演劇グループも含まれる。この土台となったのは、1942年にエルサ・オレニウス(Elsa Olenius)が創設したアワ・シアター(Vår Teater)だった。1950年代には何万人もの子供たちがこの劇場に集められ、即興や劇を演じた。それは俳優の人材開発のためというより、子供たちや十代の少年少女に自分を表現する勇気と自信を与えることがねらわれた。

ストックホルム市立劇場とパーク・シアター(Parkteatern)はアマチュアの演劇ブ



プログラムを上演している。そのほか子供たちは、規模に関係なくスウェーデンのほとんどすべての都市や町で、地元のクラブや協会、大人の教育機関によって、あるいは学校の特別プロジェクトとして、劇を演じる機会が与えられている。

映画

「映画はわが国の文化において重要で大きな部分を占めている。テレビが子供たちに与えるものはたしかに多いが、映画は芸術的体験としてはまだ過小評価されていると思う。映画館で映画を見るというのは、他では味わえない特別な体験である。きわめて独特な方法で集中することができるのだから」

スウェーデン映画協会の映画・観客部

長、ビッテ・エスキルソン (Bitte Eskilsson) は、小さな子供向け映画の国内上映本数を増やそうという計画の中心人物の一人である。

テレビがいつもついているという家庭が多く、子供たちは不適切な番組でも目にしてしまう。おかしなことに、子供が青少年向けの映画の登場人物を見て涙を流すと、大人はそれに眉をひそめることが多い。しかし大人でも子供でも、克服しなければならない辛い思い出や経験は誰にもあるものだ。感動することで人は成長する。芸術はそのプロセスを助けてくれる。

本の映画化

芸術の一形態としての児童向け映画制作については、スウェーデンは世界の最先端に

いる。国内作品の多くは、スウェーデンテレビ(SVT)と映画会社の共同制作という形をとっている。スウェーデンの児童向け映画は、子供たちを考えさせたり笑わせたりして感動させることを目標にしてきた。テーマの選択は、非常に現実的な物語から古典的なおとぎ話まで幅広い。スウェーデンの児童向け映画は主にアニメ映画と長編映画から構成されており、アニメ映画(マンガ)は文学作品をもとにしたものが多い。いたずら好きな小さなウサギと、どんな時でも優しく妹の面倒を見るお兄さんウサギを主人公にした、ウルフ・ニルソンとエヴァ・エリクソン原作の『小さな妹ウサギ』は人気映画のひとつである。またグニッラ・ベリイストム原作の『アルフォンソ』も人気が高い。



スウェーデンのアニメ映画は独自の成功を収めている。パール・オーリン (Per Åhlin) の長編映画『メロニアへの旅 (Resan till Melonia)』は、シェークスピアの『テンペスト』をこっけいに解釈し直したものである。また最新の作品としては、愉快な探偵小説『真夏 (Hundhotellet)』がある。

風変わりな映画の主人公

ヨハン・ハーゲルバック (Johan Hagelback) は映画アニメ作家である。その風変わりな荒っぽく描かれた登場人物は、ディズニー風のイラストとは似ても似つかない。ハーゲルバックは、シーヴ・ウィデルベリの作品をもとにした『ハッセの日記 (Hasses dagbok)』を映画化している。彼は子供のピジ

ュアルイメージを大切にしたいと考えているため、『ハッセの日記』も子供のお絵かきがアニメになったような作品だ。

作家でアーティスト、そして映画プロデューサーでもあるヤン・レーフは、風変わりな男を主人公にした『がらくた置き場のジャック (Skrot-Nisse)』という本を書き、テレビのアニメに取り入れた。スウェーデンのアニメ映画では、カッコいい登場人物が主人公になることはめったにない。ジャックはおそらくその典型といえるだろう。

アニメ映画は普通の長編映画より図柄も大胆になる傾向があるが、エーヴァ・リンドストロムのアニメ映画の登場人物は特に風変わりだ。『坂道 (Lutning)』、『冒険ピザ (Äventyrspizza)』、『ローフィーはお

ながすいた (Limpan är sugen)』といったリンドストロムの短編映画は、おかしなユーモアを使い、言葉がなくとも非常に表情豊かに状況をとらえている。

スウェーデンの短編映画が発展した主な要因は、公共テレビが児童向け映画の高い水準の維持に積極的な姿勢を見せたことである。パール・オーリンがテレビ番組化した『アルフォンソ』、POJプロダクション・グループ (ペーテル・コーエン、オーロフ・ランドストローム、レーナ・ランドストローム) が制作した『カッレの木登り (Kalles Klätterträd)』や『おとなになりたくなかったおじさん (Farbrönan som inte vill va stor)』などはすべて、創造性あふれるテレビ・プロデューサーたちの努力によって完成された。現在では、アニメファンにも若手のアニメーターの作品が紹介されている。中でも、リサを主人公にしたマグヌス・カールション (Magnus Carlsson) のテレビ映画や、『ロビン』、『3人の友だちとジェリー (The Three Friends and Jerry)』といったアニメ作品は、国内でも外国でも高い評価を受けている。

その他、スウェーデンの第一級の児童向け映画としては、やはりPOJプロダクションが制作した『ボムさんとニシン (Herr Bohm och sillen)』や、イルヴァ・リー・グスタフソン (Ylva-Li Gustafsson) とレナート・グスタフソン (Lennart Gustafsson) が制作した『ピンキーは空を飛べない (Binke kan inte flyga)』などがある。ここでも、主人公はスーパーヒーローよりアンチヒーローが多い。

田園詩とリアリズム

オル・ヘルボムが1960年代から70年代にかけて映画化したアストリッド・リンドグレン原作の『長くつ下のピッピ』シリーズは、スウェーデンの児童向け映画に忘れられない跡を残した。『カッレくんの冒険』や『ラスムスクんの幸せをさがして』、『おもしろ荘の子どもたち』、『やかまし村の子どもたち』、『はるかな国の兄弟』、『山賊のむすめローニャ』など、リンドグレンの他の本も次々と映画化された。

楽しい子供時代を描いたグニツラ・リン・パーションのテレビ映画、『馬の目 (Hästens öga)』や『氷のアリス (Allis med is)』は、現代のスウェーデンの子供の現実を忠実に反映している。エラ・レムハーゲン監督として一躍有名にした『13歳の誕生日 (13-årsdagen)』と、それに続く一連の青少年向け映画、さらに興行的に大成功を収めたモニ・ニルソン・ブレンストロム (Moni Nilsson Brännström) 原作の『ザジキ~それは私 (Tsatziki, Morsan och polisen)』なども有名である。飾り気のない率直なロックンロール調の母親と住む、聡明で考え深い少年ザジキは、少年少女にとって一味違ったアイドルになった。

児童文学作家のマリア・グリーベの作品を映画化した制作者の一人に、ケイ・ボラックがいる。ボラックの制作した『エルヴィス! エルヴィス! (Elvis! Elvis!)』は、さまざまな感情が交差する誰のものでもない土地に住む少年を描いた、社会的リアリズムの傑作である。グリーベの作品の登場人物の多くは、例えば『天使のともしび』でもそうだが、子供に対する理解があり、そのため時間に時間を割いてくれる大人との接触を通して、生き残る術を見つけていく。『天使のともしび』の内省的で心にしみと

おるようなイメージは、シェル・グレーデの手によって映画化され、熱狂的なファンを引きつけている。グリーベの作風は空想と現実の間で浮遊する傾向があり、それがまたアンデシュ・グレンロス(Anders Grönros)監督を魅了した。グレンロスはグリーベの作品『アグネス・セシリア(Agnes Cecilia)』を映画化し、さらに『マスター・ブローワーズ・チルドレン(The Master-Blower's Children)』という傑作を発表している。

スウェーデンの児童向け映画は長年、少年、特に1950年代の少年を主人公にしたものが多かった(ラッセ・ハルストレムの『マイライフ・アズ・ア・ドッグ』など)。だが1980年代から90年代にかけては、『真実と挑戦(Sanning och konsekvens)』、『セルマとヨハンナ(Selma och Johanna)』、『シャーディル(Sherdil)』など、おもしろい映画が次々に発表された。中でも、ルーカス・ムーディソンの『ショー・ミー・ラヴ』は国際的に高い評価を得た。これらはすべて、現代社会に住む女の子の生活を描いたものである。

スウェーデンの映画、特に少年少女向け映画は近年、とみに充実度を増している。ハラルド・ハムレルの『わが家の魔女(En häxa i familjen)』やウルフ・マルムロス(Ulf Malmros)とペーテル・ビッコ(Peter Birro)の『スウェーデンで最高(Bäst i Sverige)』などの家族映画や、クラウス・ハロ(Klaus Härö)とシェル・サンドステッド(Kjell Sundstedt)の『Elina – som jag inte fanns(エリーナ~まるで私がないみたい)』やセシリア・ネアン・ファルク(Cecilia Neant-Falk)の『もうすぐよくなるよ(Du ska se att det går över)』などのより問題性の高い映画が大変な人気を博し、芸術的にも成功を収めている。

小学生や幼児向けの作品

テレビでは就学前の子供向けに番組が大量生産され、次々に放送されているが、それ

に代わるものとして、スウェーデン映画協会は幼児向けに特別に選んだ映画を提供する活動を主催している。これらの映画は、平日の昼間に図書館の大きなスクリーンビデオで放映されるほか、週末の昼間には主要な商業映画館で上映されている。

学齢期の児童についても、同じように質の高い映画を提供する活動が進んでいる。多くの地方自治体は地元の映画館で特別の映画鑑賞会を主催しており、生徒はそこで通常の授業の一部として学んでいる。これは、子供たちに商業映画館で見られるような種類の映画とは違った映画を見せることをねらいとしている。スウェーデン映画協会はこの活動に資金を提供し、映画に合った教育資料を作成して、活動を支援している。

ビジュアルアート

1950年代にカルロ・デケルト(Carlo Derkert)は、子供たちは美術館に来てそこを探検する必要があると考えた。子供たちを見学につれて行く時、彼はストックホルム国立美術館という刺激的な環境を舞台に見立て、ドラマチックな声色や囁きを聴かせて子供たちを魅了した。また、鉛筆や消しゴム、厚紙や画用紙を大きなかごいっぱいを持って行き、何でもいからこの博物館に関係のある絵を描くようにと子供たちに勧めた。デケルトはいつも、子供たちに自分の周りの世界を探検する機会を与えるように心を配り、善悪について語る親の意見に(よかれと思って言っているものでも)影響されることがないようにした。子供たち自身の体験を何より大切に考えていたのである。

1958年に近代美術館がオープンし、デケルトは国立美術館からそちらへ引き抜かれた。鉛筆や消しゴムが入っていたかごは、美術館の中のワークショップとして生まれ変わった。1968年、アーティストのパルレ・ニールセン(Palle Nielsen)が「ザ・

モデル」なるジャンピング・ルームを作った。このジャンピング・ルームで子供たちは、特別にこしらえた飛び込み台や突堤から、プラスチックボールの海に飛び込むことができる。それ自身が生ける芸術を構成しているのだ。これは大人が子供たちに提供している世界、すなわち利益や効率のところが、想像力や発明力、あるいは遊び心や好奇心や創造力より重要視されるような社会に対する抗議を表したものであった。

近代美術館が子供たちのために行った活動は、スウェーデンの児童文化の最も良い面を表している。この方法では、先生が訪問者にいま何を見ているのかを説明するという、一方通行のコミュニケーションによる落とし穴を避けることができる。アーティストのアイデアや考え、そして子供たち自身による作品の解釈、この両者に重点を置いてオープンな話し合いをすることで、心と心の出会いが生まれ、それがワークショップで子供たち自身の創造活動へと昇華するのである。数多くの絵を見て、それらを自分の中に取り込んだ人は、それを何らかの形で表現して外へ出す必要がある。それ自体が重要なプロセスなのである。

「生きたワークショップ(Living Workshop)」という教育方法(材料と自己表現への解放的アプローチを用いたバウハウス・スクールの実験)も、スウェーデンでは子供たちが美術に親しむ上で非常に大きな影響力があった。今では、スウェーデンのほとんどの美術館がこれらの先駆者らの方法を取り入れ、子供たちや青少年にさまざまな講座やワークショップを提供している。

楽しむことが一番大切

スウェーデンで初めて子供向けの美術ワークショップが登場したのは1960年代のことだった。その背景には、学校の授業科目の中で図画が過小評価されていることへの反発があった。情報化社会においては画像が重要であるにもかかわらず、またこの科目はビジュアルアートと改称され、「映画、テレビ、ビデオの世界の動画、コンピューター画像、グラフィックデザインやレイアウト」を含むはずであるにもかかわらず、1990年代になって学校は美術の時間をさらに減らした。

今日、スウェーデンには、約40の子供向け美術ワークショップ、講座、アカデミー、それに美術やデザインのプログラムを持つカルチャーセンターなどがある。それらはフィンランドの子供たちのための美術学校を手本にしたものである。フィンランドの法律では、各地方自治体は美術教育を施すことが義務づけられているが、スウェーデンはまだそこまで到達していない。スウェーデンの多くのワークショップは幼稚園や学校と協力し合い、時には学校の正規の教育活動の一環として活用されることもある。しかし、ほとんどの活動は子供たちの余暇として行われている。また、プロセス重視のテーマ探しから、もっと伝統的で創造的な美術にいたるまで、手法はさまざまであっても、子供たちにスケッチや絵画、彫刻、版画制作など美術の基本を教えることが重視されている場所がほとんどである。

音楽

歌、童謡、遊び歌

スウェーデンの子供たちの音楽には、アリス・テグネール(1864~1943年)以来、子供向



ストックホルム近代美術館のワークショップに参加する3歳半のアルゴット。写真：ロッタ・ショーホルム(Lotta Sjöholm)。

けの音楽や歌を簡素化しないという長い伝統がある。テグネールは、スウェーデンの民謡やメンデルスゾーンやシューマン、それに彼女の言葉を借りると「子供たち自身の作曲方法」をもとに歌を作った。テグネールの死んだ年に彼女の作った数々の歌が発表され、それらは今でもスウェーデンの学校や幼稚園で広く歌われている。

もうひとつの素晴らしい宝は、アストリッド・リンドグレンが作詞し、ジャズ・ミュージシャンのゲオルク・リーデルが作曲した歌のコレクションである。「イダの歌(Ids Song)」は国中で学期末の礼拝には必ず歌われている。また、別のジャズ・ミュージシャンであるヤン・ヨハンセンが作曲した「長くつ下のピッピ」のテーマソングは、スウェーデンのあらゆる年齢層で親しまれている。

しかし、それまでの童謡や歌やリズムに一大革命を起こし、現代的な表現形式で歌を作ったのは、レナート・ヘルシングだった。ヘルシングは、児童文化に見られる「かわいらし」すぎる要素や、やたらと「教育的な」要素をなくそうとした。「教育的な芸術はよくないが、良い芸術はどれも教育的である」とヘルシングは述べている。「言葉を覚える前の子供たちに訴えるものは、詩やリズムの情動的な感情であり、感覚である」と彼は言う。ヘルシングの名を最も有名にしたのは、おそらく『ちゃっかりクラケル(Krakel Spektakel)』という選集だろう。

レナートの娘のヨハンナ・ヘルシング(Johanna Hellsing)は、父親の作った歌やアリス・テグネールの歌、古い遊び歌、それに彼女自身が子供たちのために書いた歌を歌っている。彼女はギターを持ち、秘密がいっぱい詰まっているくたくたのフェルトの帽子をかぶって、国中の図書館や保育センターを訪れては、ピンクの子ブタの指人形を(それぞれの指に1匹ずつ)呼び出すのである。子ブタたちは母ブタを探してまわ

り、見つけると、母ブタの息がつまりそうになるくらいキスの雨を降らせる。すると子供たちも自分の指を広げて子ブタを作り、キスをする。こうして感覚による自己肯定が形成されるのだ。韻を踏んで歌いながら、子供たちは飛び回り、遊び歌の言葉を叫ぶ。音楽はリズムであり、詩のメロディーである。こうして、物語を語るたびに音楽が表れる。詩が拍子をとる。「子供たちは正しい音を出せなくても、楽しければ歌うのです。わが国では、このような伝統が長く続いています」とヨハンナ・ヘルシングは語っている。

しかし、スウェーデンで子供向けの新しいレコードが出されることはめったにない。音楽市場はますます商業化され、スウェーデンの低予算のレコーディングではとても太刀打ちできないのだ。したがって、スウェーデンでは近年、子供向けのレコードの発売が比較的少ない。その中でもベストアルバムのひとつは、ユーヤ・ヴィースランデル(Jukka Wieslander)とトーマス・ヴィースランデル(Tomas Wieslander)の歌う『ミスター・クロウとママ・ムー(Mr Crow and Mama Moo)』だ。これはミスター・クロウとママ・ムーの物語と、子供たち自身の手拍子による遊びや歌をもとにしたいくつもの気まぐれな小曲を組み合わせたものである。

歌劇と楽劇

児童文化に新しく参入してきたのが歌劇である。スウェーデン南部にある2つの音楽劇場、ムシーク・イ・スコネ(Musik i Skåne)とマルメ音楽劇場(Malmö Musikteater)は、コペンハーゲンの王立劇場と協力して、青少年向けに特別に書かれた本格的なオペラを子供たちのために上演している。また、独立グループのストックホルム・オペラ・アンダーグラウンド(Stockholm Opera Underground)は古い民話を台本に取り入れており、ヴェストマンランド県立劇

場(Västmanland County Theatre)と提携しているシギュール劇場(Sigurdteatern)は、フェデリコ・ガルシア・ロルカの詩『世界はオレンジ(The World Is An Orange)』をもとに子供向けの歌劇を作った。

監督のベント・ヘグランド(Bernt Höglund)とシノグラファーのクリスティーナ・ルンドストロム(Christina Lundström)は子供たちや青少年向けに数多くの楽劇を書いている。『食器棚(Skåpet)』や『空は青い(Himlen är blå)』はヨーテボリ・オペラによって上演され、『天使(Ängel)』はパウラ・アフ・マルムボリ・ワード(Paula af Malmborg Ward)が作曲し、ノルランド・オペラによって上演された。

みんなの音楽

1940年以来、スウェーデンの地方自治体では正規の学校教育の一環として音楽教育が行われている。それは、社会階級や親の経済的地位に関わらず、すべての生徒に楽器を演奏したり歌ったりする機会を与えることを目的としている。

このようにして音楽を勉強した多くの少年少女は、独自のグループを結成するようになる。彼らにはリハーサル室を借りる補助金が与えられることも多い。これは賢明な長期的投資であることが証明されている。なぜならその投資収益は、スウェーデンのポップ・ミュージック産業の輸出収入というかたちで、後に大きく還元されるからである。例えば、スウェーデンからはヨーロッパ、ロクセット、ザ・カーディガンズ、ロビンなどのスターが出ていますが、その多くは地方自治体の音楽講座で才能を磨いたのである。今日、スウェーデンの289ある地方自治体のほとんどにおいて、このような講座を受けることができる。だが、これはエリート養成講座ではない。子供たちが仲間と共に楽器を奏でたり歌ったりする機会を与えることが、その最大の目的である。



左:ゲオルク・リーデルとレナート・ヘルシング。写真:フレドリック・パーション(Fredrik Persson)。右:ゼブラダンスの上演した『海は青い』より。写真:ゼブラダンス。

ダンス

ホールの中央で8歳の少年がジャンプし、完璧な1回転をして着地する。彼はつむじ風のような動きで、部屋をふたつに切り裂いていく。少年は自分のジャンプと回転を「ブローリン」と誇らしげに説明する。「ブローリン」とは、サッカー選手のトーマス・ブローリンがゴールを決めた時に見せるジャンプのこと。少年はダンスを習っており、新しいダンスのステップを発明したところなのだ。ヒップホップやブレイクダンスのおかげで、少年たちもダンスに興味を持つようになってきた。

子供たちはダンスを通じて、自分の感情を表現することができる。それは、内に秘めておきたいような、もろく繊細な感情のこともあれば、女の子には特に表現しにくい、もっと外部へ向かう攻撃的な感情のこともある。ダンスは言葉で言い表せないことを体で言い表す、ひとつの言語である。

舞台

学校で教えてもらうダンスも、子供たちの芸術の一形態としてのダンスも、スウェーデンでは比較的新しい現象である。子供たちや十代の少年少女向けの現代的な今風のダンスが最初に舞台上演されたのは、1990年代のことだった。現代のダンスは我流のトレーニングとワークショップを組み合わせたものが多い。ダンスがまた新たなダンスを育むのである。

エフヴァ・リリア(Efva Lilja)やビルギッタ・エゲルブラダ(Birgitta Egerbladh)など、スウェーデンの現代一流のダンス振付師の中には、子供たちのダンスからジャンルの枠を外そうと努めてきた人もいる。エヴァ・リリアは、学校の生徒たちが作った物語をもとに彼らと協力してダンスをプロデュースし、リリアのダンス・カンパニーのメンバーが子供たちと一緒に踊るといふ試みをしている。子供たちとプロのダンサーがそれぞれ思い思いに一緒に踊るのだが、それによってカンパニーの芸術的な質が落ちるといふことはまったくない。また、スウェーデンの西海岸にあるエルヴスボリ劇場(Älvsborgsteatern)は独自の児童ダンス・アンサンブルを持ち、おとぎ話に真正面から取り組んだ作品、『オオカミの道(Vargklyftan)』を上演した。これに登場する魔女は醜く恐ろしいため、観客の中で最年少の子供たちは怖がって抱き合うほどだが、最後にはおとぎ話らしく、すべてがうまく収まって話が終わる。

テアトル・トレ(Teater Tre)では振付師リサ・スベッツの指導の下、ストックホルムで初めて子供たちのダンスの常設舞台「ゼブラダンス(Zebrandans)」が設けられた。ダンスセンターが主催する子供たちのダンスの振付コンクールが毎年ここで行われ、素晴らしいダンスが披露されている。その中には、観客の子供たちの助けを借り

てパン生地を守り、パンの飾りつけをするというアグネス・ダンス一座の素晴らしいダンス『お菓子(Bakverk)』や、タイガー一座の詩的な物語『シマリラの国(Simarillas land)』などがあつた。

ゼブラダンスとテアトル・トレは、現在は別々に活動し、ゼブラダンスは全国をツアーで回っている。子供たちのためにプロデュースされた最近のダンス作品としては、アグネス・ダンス一座の『ノンストップ』、ミンナ・クルック(Minna Krook)の『去ってしまった!(Bortat!)』、それにグニッラ・ハイルボルン(Gunilla Heilborn)の先駆的な『海は青い(Havet är blått)』などがある。

一方、スコーネでは少年少女のためのダンス・フェスティバル「サルト!(Saltol!)」が毎年開催され、スウェーデン南部全域から多くの参加者が集まる。1997年から1999年までに、このフェスティバルに3万9,500人の子供たちや十代の青少年が参加し、385件の舞台が上演された。これらの子供たちは、それまで一度もダンスの上演を見たことがない者がほとんどだった。

学校

今日、スウェーデンではダンスを授業の一環として教えている学校が多く、スウェーデン文化機構に所属する国のダンス・コンサルタントがコーディネーターとしての役割を果たすとともに、政治家への働きかけも行っている。学校のダンスへの興味を高めるため、各地域にもダンス・コンサルタントが置かれ、ダンス教師や振付師、ダンサーが新しい仕事を見つけられるよう支援している。

子供たち自身の創造性

「子供たちは誰よりも素晴らしい芸術家だ」と、ヘニング・マンケルは言う。マンケルは子供向けにも大人向けにも本を書いている作家だ。「子供時代には、想像力と現実と同じくらい大切に、同じくらい大きな力を持っている」

「大人になって芸術家になろうとするクレイジーで情熱的な人は、子供の時に育んだ想像力を取り戻そうと一生努力しなければならない。素晴らしい芸術家なら誰でも、必ずその子供時代がインスピレーションの源になっているはずだ」

子供の創造力を理想化することはたやすい。芸術とは何よりもまず知識を得るための手段であり、自分自身や自分の存在を理解するために私たちはさまざまな表現方式を使う。子供たちはミュージックの世界を自然に動き回ることができる。子供たちが文化に触れられるようにするのは、大人の責任である。なぜなら文化こそ、子供たちの創造的活動の基盤になり得るものだからである。

ダンスをしたり、歌ったり、音楽を奏でたり、あるいは絵を描いたり、劇をした

りする子供たちは、自己表現や読み書き、それに数学においても優れている。これは証明された事実である。この事実を踏まえると、文化的体験はそれなりに価値あるものと考えられる。しかし、親が成果主義になるという危険性ははらんでる。

ダンスや言葉や絵、歌や音楽や演劇といつても、小さな子供たちはそれらを区別して考えたりはしない。フィンランドの神経学者、マッティ・ベルイストロム(Matti Bergström)教授によると、子供たちは「可能性のめがね」をかけているのだという。何でも、他の何か予期せぬものに変身する可能性がある。それはちょうど芸術と同じだ。遊びの本質は、混沌状態に道筋をつけることであって、隣の2歳の子供より自分のほうが上手な絵を描けることを親に見せることではない。

だからこそ、創造的なプロセスに自ら関わっているアーティスト、子供たちと同じように芸術はそれ自体が報酬であり、あらゆる文化的な境界を越えて好きなやり方で作り直し、焼き直せるものであることを知っているアーティストに、子供たちが出会うことが非常に大切なのである。だがまた子供たちには、少年期の発達の過程を熟知している教師も必要だ。子供たちは必ずしも今の現実を生きる強さを持っているわけではない。彼らの現実が困難で自力で対処できないような時、自分なりのやり方を編み出さなければならない。夢は子供たちがこの世を生き抜くのを助けてくれる。遊びを楽しみ、創造力を発揮することが、私たちの持てる一番大切な能力なのである。

ピア・フス(Pia Huss)
カッタ・ノルデンファルク
(Katta Nordenfalk)

ピア・フスとカッタ・ノルデンファルク

ピア・フスはスウェーデンのアート・ジャーナリストである。ピア・フスはスウェーデン最大の日刊紙「ダーゲンスニューヘーテル」で、児童文学と児童演劇の批評記事を担当している。カッタ・ノルデンファルクは児童や青少年の文化、特に芸術分野について、教育雑誌「ペダゴジスカ・マガジネット(Pedagogiska Magasinet)」やその他の出版物に寄稿している。

この記事に表明された意見の責任は、すべて著者に帰属する。

www.sweden.se

The official gateway to Sweden

SI.
Swedish Institute

このテキストは www.sweden.se でも閲覧できる。スウェーデン文化交流協会の事前の承認を得ずに再使用することを禁じる。テキストの使用許可を得るには、webmaster@sweden.se に連絡のこと。写真やイラストの転記・転載を禁じる。

スウェーデン文化交流協会(SI)は、スウェーデンについての知識を海外に広めるために設立された公共機関である。スウェーデン社会のさまざまな側面について紹介するため、複数の言語でさまざまな出版物を刊行している。

スウェーデンに関するさらに詳しい情報は、www.sweden.se (スウェーデンの公式サイト)、あるいは自国のスウェーデン大使館または領事館まで。

スウェーデン文化交流協会 (Swedish Institute)

Box 7434, SE-103 91 Stockholm, Sweden.

事務所: Skeppsbron 2, Stockholm.

メール: si@si.se. ウェブサイト: www.si.se

www.swedenbookshop.com